

ヒメトビウンカに対する本田防除剤の効果検証

1 情報・成果の内容

(1) 背景・目的

近年、イネ縞葉枯病の発生が湯梨浜町を中心に増加しており、その対策が急務となっている。本病の媒介虫であるヒメトビウンカの防除対策として、播種から移植時の育苗箱施用剤の処理および水和剤等の本田散布による体系防除が基本となっている。しかし、本病の少発生状態が長く続いたこと、ならびに育苗箱施用剤の広域普及により、近年、ヒメトビウンカに対する本田防除剤の効果は十分に検討されていない。そこで、鳥取県において一般的に使用されている農薬の実用性を再確認するとともに、ウンカ類に対して高い効果が期待できる新規殺虫剤スルホキサフロルの防除効果についても検討した。

(2) 情報・成果の要約

ヒメトビウンカ中～多発生条件下において、スルホキサフロルを含む散布剤はヒメトビウンカに対して優れた防除効果を示す。一方、ウンカ類本田防除用として使用されている既存剤のヒメトビウンカに対する効果は低く、実用的な防除効果は認められない。

2 試験成果の概要

- (1) ウンカ類本田防除用として使用されている水和剤（4 剤、いずれも実用濃度）および粒剤（2 剤）のヒメトビウンカに対する防除効果は低く、実用性は認められなかった（図1、2）。
- (2) ヒメトビウンカ中～多発生条件下において、スルホキサフロル剤は高い防除効果を示し、残効期間は散布後約 12 日間程度であった。一方、ヒメトビウンカ甚発生条件下での防除効果はやや低下した（図1）。なお、実用上問題となる薬害は認められなかった。

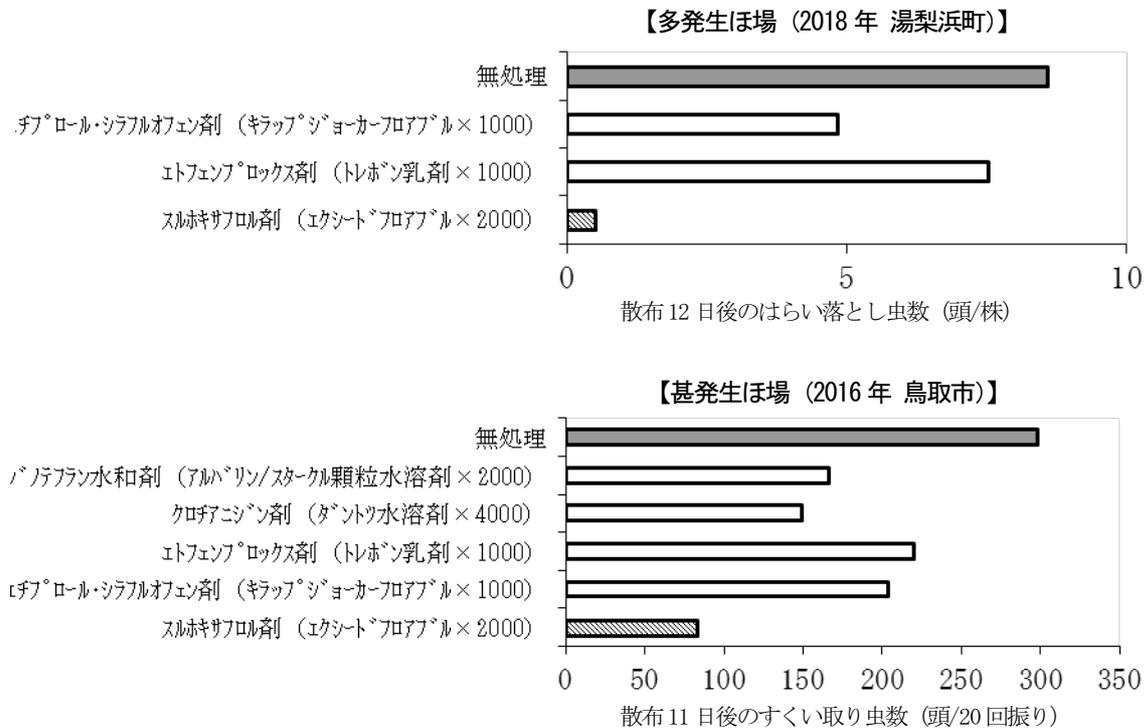


図1 ヒメトビウンカに対する水和剤の防除効果

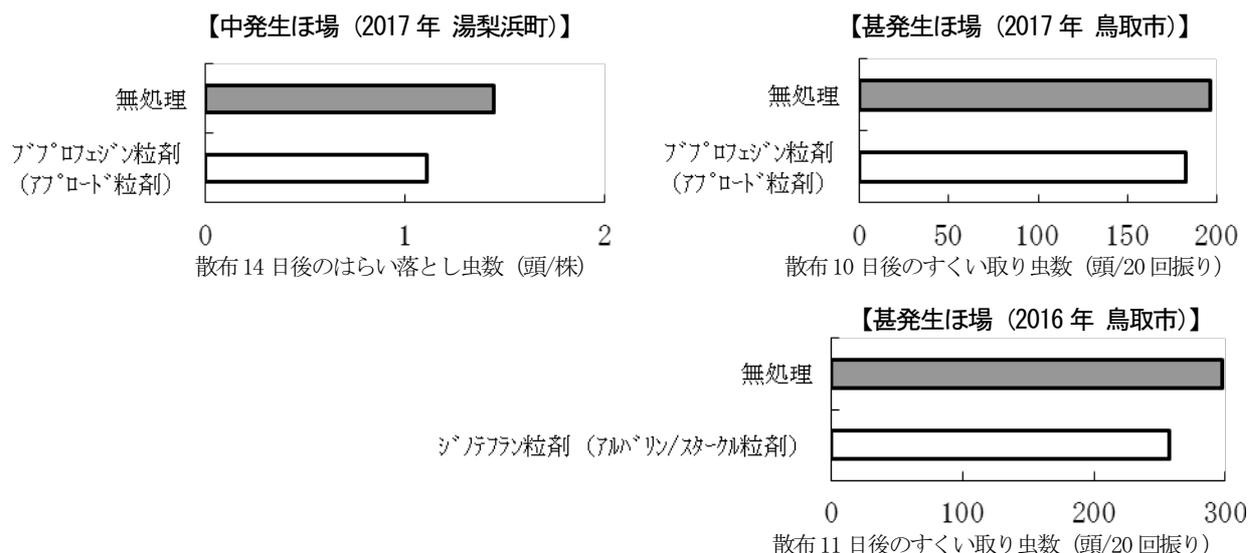


図2 ヒメトビウンカに対する粒剤の防除効果

注1) 耕種概要

[図1] 上図:試験場所;湯梨浜町上浅津、品種;きぬむすめ、出穂日;2018/8/21、散布日;2018/7/2、

下図:試験場所;鳥取市紙子谷、品種;ひとめぼれ、出穂日;2016/8/1、散布日;2016/8/9

[図2] 左上図:試験場所;湯梨浜町上浅津、品種;きぬむすめ、出穂日;2017/8/20、散布日;2017/7/11、

右上図:試験場所;鳥取市紙子谷、品種;ひとめぼれ、出穂日;2017/8/1、散布日;2017/8/9、

右下図:いずれも図1下図と同様

注2) 処理量 [図1]いずれも150L/10a散布。展着剤としてグラミンS×3000を添加

[図2]いずれも3kg/10a湛水散布。

3 利用上の留意点

- (1) 本技術の普及対象はヒメトビウンカおよびイネ縞葉枯病多発地域とする。
- (2) 2020年1月15日現在、スルホキサフロルを含む散布剤として、エクシードフロアブル（スルホキサフロル20.0%）、エクシード粉剤DL（スルホキサフロル0.50%）等があり、ウンカ類以外にツマグロヨコバイ、カメムシ類に対して農薬登録されている。しかし、鳥取県において本剤のカメムシ類に対する効果は既存剤より低く、実用的な防除効果は期待できない。なお、適切な処理方法については農薬の登録内容に従う。
- (3) 薬量が不足すると防除効果が低下するので、規定量を均一に散布する。
- (4) イネ縞葉枯病による被害が問題となる地域では耕種的防除法（秋～早春のほ場の耕うん、早春の畦畔除草等）を併用してほ場周辺のヒメトビウンカ密度を低減させると、薬剤の効果がより安定する。

4 試験担当者

（環境研究室 研究員 福田侑記*
主任研究員 奥谷恭代）

*現 西部総合事務所農林局西部農業改良普及所 普及員